

僕を後押ししてくれたもの

宮城県栗原市立若柳中学校

二年 佐々木 遥 紀

「本当に、どうしたらいいのだろう…。」
あの時の僕は、自分で決断することができず、ただただ悩むばかりで前に進むことができませんでした。

間近に迫った夏休み。僕はアメリカにホームステイに行くか、それとも一年生部員として、先輩方の最後の大会に応援に行くべきかという二つの選択肢に揺れ、心を決められずいました。選ぶことなどできないほど、僕にとってはどちらも重大事。悶々としたまま時間が流れていきました。

僕は三歳から英語教室に通い、小学生になっても会話を中心の英語を学び続けてきました。教室では日本語をしゃべってはいけないという厳しいルールがあり、僕はまずその苦しみを味わうことになりました。最初は大変さしか感じなかつたけれども、家でもリスニングを欠かさず行い、テストでA判定を取れるようになると、少しずつ英語の楽しさを感じるようになりました。

英会話に、自分なりに自信を深めてきたころ、同じ教室の友達と一緒に、三週間ホームステイに行けるチャンスが巡ってきました。

「やった、アメリカに行けるぞ。どんな所だろう…。僕の英語は通じるかな…。」

海外に行ける嬉しさと、これまでの苦勞が実を結んだという思いで胸がはち切れそうでした。

しかし、喜ぶ自分の前に立ちはだかつたのは、皮肉にも僕が大事にしているもう一つのもの——「剣道」でした。

中学生になって、僕の生活の中心は常に剣道であると言っても過言でありませんでした。来る日も来る日も、僕はひたすら剣道の稽古に打ち込んできました。

休日や夜間の稽古もあり、体のできていなかったころは、正直その辛さに負けそうにもなりました。でも、しんどいのは自分だけではない。そう思えたのは、僕よりも数倍もうまく気迫に満ちた先輩の存在でした。稽古に取り組む真剣さは、鬼気迫るほどでした。また教えてくださる先生方の熱意に包まれていたからだとも思います。辛さ以上に、上達したという思いが勝っていたと思うのです。

そして何よりも、別の道場で同じ剣道を習う弟に負けたくないという気持ち、僕の心にもいつもありました。小学生の県大会で、上位入賞を重ねる弟の存在に、応援する反面、心の奥でいつも悔しさを感じていました。僕だって必ずや負けない活躍をしてみせる—その決意に、自分から屈することなどできないという意地が僕にもありました。

捨てがたい二つのものに挟まれていたのは両親も同じでした。話し合っても結論は出ず、悩み抜いた末、僕は親と一緒に顧問の先生に相談を持ちかけました。

「アメリカに行ってこい。」—先生はあつけないほどストレートな答えを、僕に与えたのです。

そのひと言は、雲間から光が射し込んだかのように、僕の心をすっきりとさせ、安心させてくださいました。進むべき道がはっきりとして、僕は乗っている車のスピードが急に加速し始めたように感じま

した。

アメリカ旅行では、同じ年齢の子供たちとのキャンプ、普通の家庭でのホームステイ、テーマパーク巡りと、初めて味わうこと続きました。それと、生きた英語を聞き取り、会話が通じたときはとても感激しました。

彼らは日本人と違って、ダイナミックな印象が強く、大きなアクションとともに明るさを押し出すかのように話しかけてきました。声の小さい人などいないのではないかと、と思えるほど僕らを圧倒し、自分に欠けている面を気付かせてくれたようにも感じました。これまでの自分を振り返り、そんなことを考えられただけでも来た甲斐があつたと思えました。

ところで、アメリカ滞在の後半。僕は「早く剣道をした」という欲求と闘っていました。特別な空間での新鮮な発見、変化続きの体験を満喫しながらも、ふとした瞬間、竹刀を手にしたくてならなかつたのです。まるで幼い子供が何かを欲しがるとい…。

「僕は剣道が好きだ」—改めて自分の懸けるものを強く認識したのです。

一年後のこの夏。僕たちのチームは、地区大会に勝ち、県大会、東北大会、そして全国大会へと駒を進めることができました。ここまで先輩や仲間と一緒に、稽古に励んできたことは言うまでもありません。でも、それを苦に思うことはなくなりました。剣道をやれるという喜びが、辛さや苦しい試合展開にも打ち勝つ自信へとつながってきたと思えるからです。僕の背中を押してくれる、多くの人たちの思いや支え。それに応えるためにも、僕はこれからも精一杯稽古に励み、自分のための努力を積み重ねていきたいと思えます。